

古代斑鳩の都市構造

相 原 嘉 之*

On the Urban Structure of Ancient Ikaruga

Yoshiyuki AIHARA

要 旨

古代斑鳩地域は、聖徳太子一族が宮や寺院を建立し、都市的な様相を示していた。その景観は、方格地割りをもつ構造を復元する案も提示されている。しかし、遺跡の年代や変遷、さらに造営方位を詳細に検討すると、古道（斑鳩大路）を基準として、宮や寺院が微高地に配置されていることが判明した。このような都市構造は、同時代の飛鳥地域と共通することから、同じ思想の基に造られたと考えられる。

キーワード：聖徳太子・斑鳩、法隆寺、龍田道、都市計画

I はじめに

天智9年（670）4月30日条「夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も余ること無し。大雨ふり、雷震る」とある¹⁾。法隆寺（斑鳩寺）の焼失の記事である。この記事の真偽が、長らく法隆寺再建・非再建論争の論点でもあった²⁾。しかし、若草伽藍跡の調査において、ここが創建「法隆寺」であり、焼失している事実は、論争に一定の結論を与えた。

推古元年（593）、聖徳太子³⁾が摂政・皇太子となり、蘇我馬子と共に政治を動かし、推古天皇を支えた。聖徳太子の事績として、確実に記されるのは、経典の講話と憲法十七条のみで、他の政策は、太子単独の事績かは史料上わからない。しかし、聖徳太子と蘇我馬子がツートップとして、政治を動かしていたことから、様々な政策は、推古天皇を頂点とした二人の共同政策であり、役割分担がなされたものと推定する⁴⁾。

西暦600年の第1回遣隋使の帰国を契機に、推古朝の政策は大きく動いた。その背景には、隋の文帝から是正された政治体制の変更があり、東アジア世界での倭国の国家体制の強化を図る必要があったためと考えられる。

推古9年（601）2月条「皇太子、初めて宮室を斑鳩に興てたまふ」とあり、聖徳太子は斑鳩宮を造営し、推古13年（605）10月に遷った。推古天皇の小墾田宮が2年余の造営期間であっ

たことに対して、斑鳩宮は3年余もかかっている。これは、天皇と上宮王家の造営体制の違いや、皇子宫と共に斑鳩寺を造営していたこと、さらに、母や妃の宮なども造営していたためであろう。

この斑鳩地域は、東を富雄川、南を大和川、西を竜田川に挟まれ、矢田丘陵（松尾山）の南麓に位置している地域である。ここは難波から大和川を遡り、亀の瀬・龍田山を越えて大和に入った水陸交通の要衝の地である。このために聖徳太子は、膳氏の治めていた斑鳩に新たな拠点を設けたのである。

7世紀前半の斑鳩地域には、後述するように、多くの宮と寺院が建立されており、当時の飛鳥の都に対する「副都心」的な様相をしていたことが推定される。この地域には、法隆寺西院伽藍の方位とは異なる「偏向地割」と呼ばれる約20度⁵⁾西偏する地割りが、法隆寺から東に遺存している。若草伽藍跡や東院下層（斑鳩宮）の遺構が類似の振れをもつことから、方格地割があったのではないかとされている。これまでの研究でも、この方格地割を容認する見解が多い（酒井2006・2009）。また、この偏向地割の範囲が、法隆寺の所領と重なることも、これを裏付けている。しかし筆者は、飛鳥地域の都市構造を復元する中で、7世紀前半において、方格地割はまだ施工されず、古道を基準とした施設配置であることを示してきた（相原2013）。

本稿では、この斑鳩地域の都市景観の復元をすると共に、当時の首都であった飛鳥との比較から、斑鳩の都市構造の実態について検討する。

II 斑鳩の諸宮

推古9年（601）2月条に「皇太子、初めて宮室を斑鳩に興てたまふ」とあるように、聖徳太子は斑鳩宮の造営に着手し、推古13年（605）10月に遷宮した。しかし、斑鳩には、斑鳩宮だけではなく、多くの宮が営まれており、妃たちが居住していたという伝承もある。つまり、妃は必ずしも聖徳太子と同居していたわけではない。『上宮聖徳法王帝説』によると、「斑鳩宮」に居住する山背大兄王および兄弟は合わせて「十五王子等」とある。さらに推古29年（621）2月5日条には聖徳太子は「斑鳩宮に薨りましぬ」とあるが、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』などでは飽波宮とされている。これらのことから「斑鳩宮」とは広狭二義の意味があり、聖徳太子が主として居住した狭義の「斑鳩宮」と、斑鳩地域にある諸宮として広義の「斑鳩宮」がある（仁藤1985）。史料を読むときは、これらを識別しながら読む必要がある。本稿では、狭義の宮を「斑鳩宮」、広義の宮々を「斑鳩諸宮」として記す。

斑鳩宮 推古9年（601）2月に斑鳩宮の造営に着手、推古13年（605）10月に遷宮した聖徳太子の宮である。聖徳太子が推古30年（622）に亡くなった後は、山背大兄王に伝領されたと考えられている。さらに、皇極2年（643）に上宮王家が滅ぼされた時に、灰燼にきしたとされる。

『三代実録』貞観元年（859）5月19日条に「法隆寺の東院は是れ聖徳太子の居せし所にして堂宇旧存し、遺像是に在り」とあり、天平宝字5年（761）の『法隆寺東院縁起』に遺像の記載があることから、法隆寺東院を中心とする地域に比定されている。

東院地区の発掘調査により、16～17度西偏する規則的に並ぶ二時期の掘立柱建物群や溝、砂

利敷が確認された。さらに小型の瓦や壁土も出土している。その後の調査で、敷地は2町四方で、東院地区の建物群は、その南東隅に位置すると考えられている（国立博物館 1948・奈文研ほか 1985）。また、小型瓦や壁土の出土から、ここは宮の中心部ではなく、宮内の仏殿の可能性も指摘されている（平田 2020）。

あくなみあしがきのみや
飽波葦牆宮 『日本書紀』（推古 29 年（621）2 月 5 日条）によると、聖徳太子は斑鳩宮で没したとするが、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』『聖徳太子伝私記』などには、田村皇子が飽波葦牆宮に聖徳太子を見舞い、そこで没したとする。これを『日本書紀』の「斑鳩宮」を「斑鳩諸宮」とみれば、両記事の整合性はとれる。さらに『聖徳太子伝私記』では、この飽波宮に膳善岐々美郎女が居住していたとしており、さらに長谷王に伝領されたと考えられる。

その場所の伝承地としては、龍田道の南の成福寺周辺と推定されており、その北に隣接する上宮遺跡では、平城宮式軒瓦をもつ奈良時代的大型建物群や飛鳥時代の遺構も断片的に確認されている。奈良時代の建物群は柱筋や棟筋を揃えた規格性の高い大型建物群で、平城宮式軒瓦が出土することから、公的施設である可能性が高い。これらは 0～3 度西偏する。この建物群は、称徳天皇が行幸した飽波宮（『続日本紀』神護景雲元年（767）4 月 26 日条）とも整合する（斑鳩町 1992）。

この下層では、かなり削平されているため、建物等にはまともでないが、20 度程度西偏する柱状穴遺構や 32～34 度西偏した溝などが確認されている。そして、奈良時代の整地土には飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器がまとまって出土しており、埴や焼けた凝灰岩片も出土している。さらに成福寺周辺では飛鳥Ⅱの土器で埋められた井戸も確認されている。これらのことから、飽波葦牆宮は上宮遺跡周辺に推定できる（平田 1996）。

岡本宮 推古 14 年（606）是歳条に「皇太子、亦法華経を岡本宮に講く」とある。『日本霊異記』には、法起寺（岡本尼寺）の場所と記す。また、『聖徳太子伝私記』の「法起寺塔露盤銘」によると、聖徳太子の遺命をうけて山背王が岡本宮を寺にしたとする。

法起寺の発掘調査によると、伽藍遺構の下層から、20～26 度西偏する掘立柱建物・堀・溝・井戸などが確認されている。特に、井戸は一木削り抜きの井戸枠をもつ深さ 7m で、周囲に二重の溝が巡る。これらはいずれも断片的な遺構ではあるが、東西 100m 以上、南北 180m 以上の範囲に展開する。また、7 世紀前半の土器や 620～630 年代の素弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、一部に小規模な仏殿があったと推定されている。これらの時期や遺構からみて、岡本宮の可能性が高い（奈良県 1969）。

岡本宮の居住者については、明確な記録はない。しかし、聖徳太子が岡本宮で法華経を講じていることや、山背王に岡本宮を寺にするように遺命していること。また、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によると、聖徳太子の推古天皇への講経に対しての土地施入に、蘇我馬子に関わっていることから、聖徳太子・山背王・蘇我馬子に関わる女性として、山背王の母の刀自古郎女が居住していた可能性が高い。

なかつみや
中宮 中宮の実態については、明確な記録がない。しかし、現在、中宮寺に残されている「天寿国繡帳」残欠の銘文が『上宮聖徳法王帝説』に記されている。それによると、橘大郎女が推古天皇に頼んで、聖徳太子と穴穂部間人皇女への追慕から繡帳を作ったことが記されている。

また、『聖徳太子伝暦』『聖徳太子伝私記』には、穴穂部間人皇女の宮が、後に中宮寺になったと伝承している。このことから、中宮には、穴穂部間人皇女と橘大郎女が居住していたと推定されている。「中宮」の名前の由来については、穴穂部間人皇女が用明天皇の太后（中宮）であったからという理解と、葦墻宮・岡本宮・斑鳩宮の中間に位置するからという理解を、『聖徳太子伝私記』に併記されている。

この中宮は、現在の中宮寺ではなく、その東方の中宮寺跡下層と推定されている。発掘調査では、明確な下層遺構は確認されていないものの、伽藍との位置関係から、8～10度西偏する掘立柱建物・堀が中宮の一部の可能性が考えられる（斑鳩町 2013）⁶⁾。

III 斑鳩の諸寺

斑鳩地域にある寺院は、斑鳩寺（若草伽藍）を除いて、斑鳩諸宮が寺院にされたものが多い。それらは、聖徳太子没後の創建である。ここでは斑鳩諸寺について、その概要を記す。

斑鳩寺（若草伽藍） 法隆寺西院伽藍の南東に位置する「若草伽藍」と呼ばれる創建「法隆寺」である。推古9年（601）に、聖徳太子によって斑鳩宮とセットで建立されたと考えられる。「法隆寺金堂薬師如来像光背銘文」や『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によると、用明天皇が病氣平癒を願って寺と仏を発願したとするが、用明天皇が崩御されたことから、推古天皇と聖徳太子が引き継ぎ、推古15年（607）に建立したと伝える。さらに天智9年（670）に焼失の記事があり、現在の法隆寺の再建・非再建論として長らく論争が続いていた。この論争に一定の決着をもたらしたのが、若草伽藍の発掘調査成果である。

法隆寺の西院伽藍の南東に巨大な礎石が置かれている。昭和14年（1939）以降の調査により、南に塔、北に金堂を配置する四天王寺式伽藍配置が判明した。回廊・中門等の他の堂塔は確認されていない。この伽藍の主軸は24度西偏する。また、北面と西面の掘立柱大垣が確認されており、寺域は東西150m、南北170m程度と推定されている。これらの堂塔の造営時期については、出土瓦等から、創建は601年前後で、607～610年頃には金堂が完成したと推定される。塔の建築は622年頃にはじまり、620年代には完成する。皇極2年（643）には上宮王家が滅亡するが、大化4年（648）には食封が施入され、白雉元年（650）に金堂の四天王像が造られている、さらに天智5年（666）にも金銅如意輪観音半跏像を作り、若草伽藍に納められている。このことから、上宮王家滅亡によっても、若草伽藍は存続していたことがわかる（奈文研 2007）。

しかし、天智9年（670）4月30日条「法隆寺に災けり。一屋も余ること無し」とあり、若草伽藍は焼失した。若草伽藍の調査では、火災の痕跡は見られなかったものの、西方110mでは、焼けた瓦や、壁画のある壁土が見つかったことから、この記事が裏付けられている（斑鳩町 2004）。

法隆寺西院伽藍 天智9年（670）に若草伽藍焼失後に再建したとされる西院伽藍である。創建伽藍が若草伽藍であることは判明して、論争に一定の結論を得たが、まだ西院伽藍が、焼失前に建築がはじまった可能性も指摘されている（鈴木 1995）。

法隆寺西院の伽藍配置は東に金堂、西に塔を配置し、中門からのびた回廊が、これらを取り囲

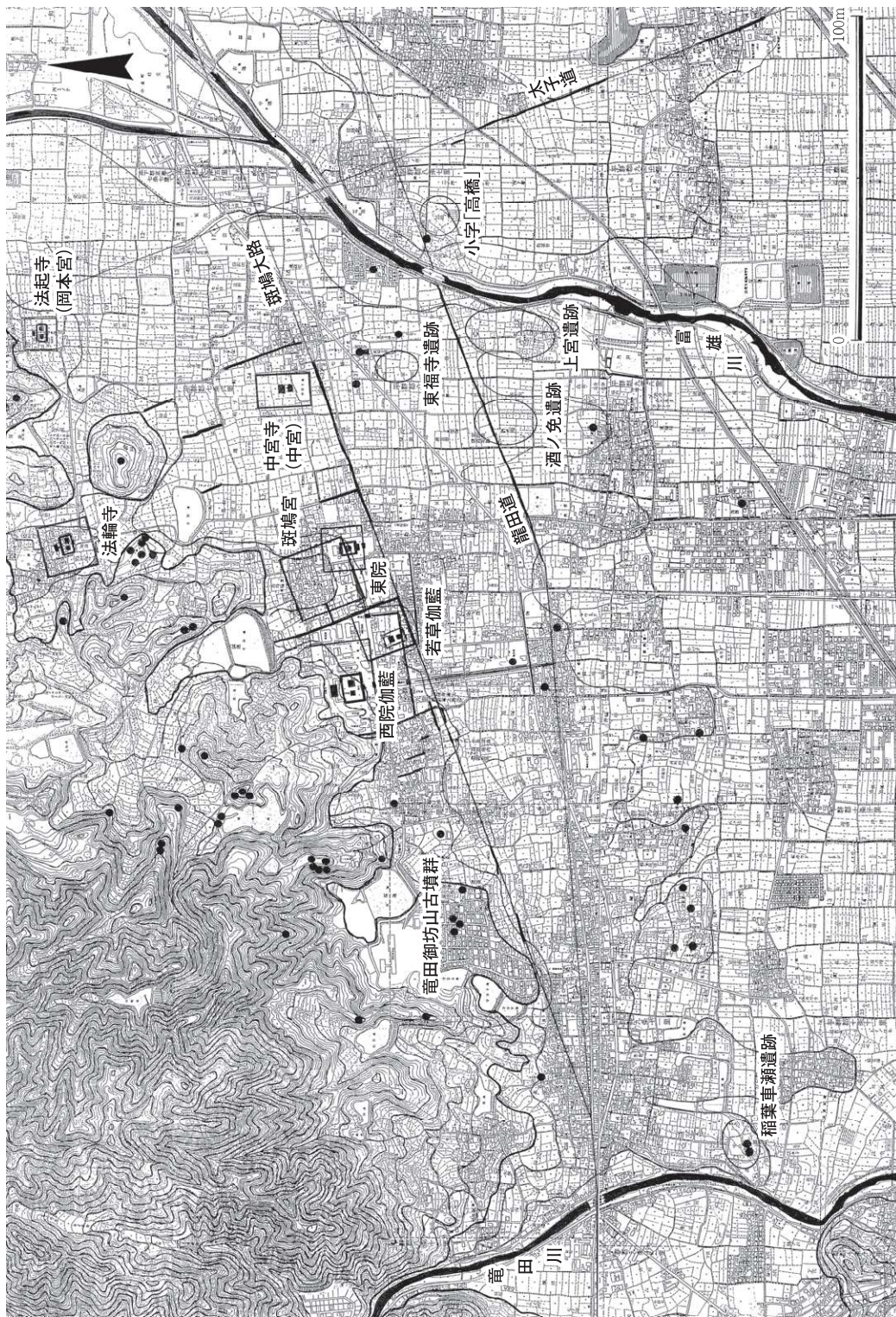


図1 斑鳩地域の遺跡 (1:20000)

む。回廊の北方には講堂が配置される法隆寺式伽藍配置である。その造営方位は、8～9度西偏する。

西院伽藍の再建は、天智9年（670）の焼失記事以降と考えられるが、金堂外陣天井板の古材が668～669年伐採の建築部材が使用されている（光谷ほか2007）。これは焼失直前の微妙な時期である。いずれにしても、この頃以降に金堂の建築がはじまったと考えられる。また、その完成は680年以前には完成したと考えられる。一方、塔の創建は、雲肘木の年輪年代や建築様式などから670年代初頭と推定され、680年代に中断時期はあるものの、塔内の四面塑像が造られた和銅4年（711）に完成した。そして中門は690年代から、回廊は700年代から建築がはじまり、中門の力士像が造像される和銅4年には完成したと考えられる（奈文研2007）。

一方、東院伽藍は、斑鳩宮跡地に、聖徳太子のために建てられた八角堂である。『皇太子御齋会奏文』によると、天平11年（739）に、僧行信が阿倍内親王（後の孝謙天皇）に奏上して造らせたとされており、『法隆寺東院資材帳』には光明皇后や行信の寄進があったと記す。

中宮寺 『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に記される聖徳太子建立七ヶ寺のひとつで、中宮尼寺ともいう。『聖徳太子伝暦』『聖徳太子伝私記』によると、穴穂部間人皇女の宮を中宮寺にしたとする。この寺には、聖徳太子が往生した天寿国の様子を刺繍した「天寿国繡帳」が残されている。現在はその一部が残されるだけだが、『上宮聖徳法王帝説』によると、太子の死後に橘大郎女が、推古天皇に願い出て、作らせたとされている。現在の中宮寺は、法隆寺東院伽藍の北東に隣接したあるが、これは17世紀初頭に移したもので、中宮寺創建伽藍は、東院の東方500mにある中宮寺跡である。

中宮寺跡の発掘調査は昭和38年（1963）からはじまり、その概要が明らかとなっている。寺域は東西126m、南北165mを掘立柱塀あるいは築地塀で囲む。南辺には南門、北辺には小規模な北門がある。中心伽藍は、南に塔、北に金堂を配置する四天王寺式の伽藍配置で、中門・回廊は確認されていない。金堂は東西16.7m、南北14mの基壇で、当初は凝灰岩の基壇化粧であったものを、瓦積基壇に改修している。一方、塔は一辺14mの基壇で、巨大な心礎が地下に埋め込まれている。心礎上面には金環やガラス玉などが埋納されていた。南門の南の偏向地割りに沿って、6基の柱穴が並び、幢幡遺構と考えられている。これらの伽藍は、出土瓦からみて、創建時期は620～630年代と推定され、主軸は4～5度西偏する（斑鳩町2013）。

法起寺 斑鳩地域の北東にあり、「斑鳩三塔」の一つとしても著名な寺院である。岡本寺（岡本尼寺）や池後寺（池後尼寺）とも呼ばれており、創建当時の塔が現存する。『聖徳太子伝私記』に引用された「法起寺塔露盤銘文」によると、推古30年に（622）に聖徳太子がなくなる時に、岡本宮を寺に改めよと山背王に遺言したとされる。そして、舒明10年（638）に金堂を建て、天武14年（685）に塔の造営を始めたとされる。

法起寺の発掘調査は昭和35年（1960）にはじまり、その概要が判明してきた。伽藍は、西に金堂、東に塔、北に講堂を配置し、中門から伸びる回廊が、金堂・塔を囲み、講堂の東西にとりつく法起寺式伽藍配置である。金堂は東西16m、南北12.7mの基壇で、7世紀中頃の素弁瓦が出土している。塔は一辺11mで、7世紀後半の法隆寺式軒瓦が出土している。これらの伽藍の方位は、3度12分西偏する（石田1960）。

法輪寺 「斑鳩三塔」のひとつとして著名な寺院で、三井寺とも呼ばれる。法輪寺の創建については、ふたつの伝承がある。平安時代初期に成立した『上宮聖徳太子伝補闕記』によると、斑鳩寺が被災したので三井寺を造ったというもの。鎌倉時代の『聖徳太子伝私記』に引用される「御井寺勘録寺家資財雑物等事」には、聖徳太子の病氣平癒を祈願して、山背王・由義王らによって建てられたとするものである。このように斑鳩寺が焼失した天智9年（670）以降か、聖徳太子が亡くなった推古30年（622）以降に創建されたことになる。

法輪寺の発掘調査は昭和25年（1950）にはじまり、その概要が判明してきた。寺域については明確ではないが、伽藍および周辺の地形から、100m程度と想定される。塔は昭和19年（1944）の落雷による焼失まで現存しており、金堂・講堂は旧位置に建てられていることがわかっている。中門からのびる回廊が西塔と金堂を囲んで、講堂がその北外側に建つ法隆寺式伽藍配置となる。その造営方位は、1972年の報告では、16度西偏⁷⁾すると記されている（観光資源保護財団1972）。金堂は15×13mの基壇規模で、講堂は30×12.6m、回廊は未確認である。塔は一辺12.4mの基壇で、法隆寺式軒瓦が出土することから、金堂と共に、7世紀後半の建築と推定される。しかし、その基壇内には船橋廃寺式軒丸瓦が含まれていることから、塔建立以前の7世紀前半に仏堂があったと考えられる（平田2003）。この年代観は、先の二つの創建伝承とほぼ一致することから、7世紀前半に仏堂が造られ、7世紀後半に伽藍寺院へと整備したと推定する。

IV 斑鳩の集落遺跡

斑鳩地域では、古墳時代の遺跡は、古墳を除いて非常に少ない。古墳時代の土器が散布する遺跡はあるものの、確実に6～7世紀代の建物が確認されているのは、下記の3遺跡だけである。

酒ノ免遺跡 龍田道の南北に広がる遺跡であるが、その分布状況をみると、古墳時代後期の中心は龍田道に南接する部分であった。掘立柱建物を中心とした集落は、重複関係や方位、出土遺物によって4時期には区分でき、45度西偏→0度→20度西偏→70度西偏と変遷する。このうち7世紀初頭は20度西偏する時期にあたるが、7世紀中頃以降の建物はみられない。なお、当遺跡の南方は、湿地の様相を呈しており、居住には適していないと考えられている（藤井1986）。

東福寺遺跡 龍田道の北部に位置し、調子丸古墳を含む遺跡である。龍田道南方には、前述した上宮遺跡が確認されている。東福寺遺跡では古墳時代の建物や溝と飛鳥時代の建物、そして中世の遺構が確認されている。7世紀の建物は1棟だけで、ほぼ正方位を示すが、時期の詳細な特定ができない（藤井1986）。

稲葉車瀬遺跡 竜田川左岸の矢田丘陵から南に延びる微高地先端に位置する。古墳時代中期～後期の古墳群が築造され、その後に6世紀後半の竪穴建物9棟の集落が設けられる。さらに7世紀初頭には、5～6棟の掘立柱建物集落に変化している。これらの掘立柱建物の造営方位は、大きく9～18度西偏、34～38度西偏の二種類に区分できる。古墳築造から時間をあけず、竪穴集落になることから、古墳群と集落の主体との関連は薄いものと考えられる。また、竪穴集落から掘立柱集落への変化の時期が、7世紀初頭であることから、斑鳩中心部との関連性も示唆さ

れている。龍田道を直線で延長すると、当遺跡の南端をかすめ、竜田川を越えると、三室山の北麓を通過する。つまり、竜田川の渡河地点に位置する（檀考研 2016）。この道を山川均氏は龍田道と想定し（山川 1996）、鷺森浩幸氏は「志比坂路」に比定する（鷺森 2001）。また、『続日本紀』天平神護元年（767）閏 10 月 3 日条の因幡宮をこのあたりに推定する理解もある（石上 1971）。

V 斑鳩地域の都市計画の検討

斑鳩の偏向地割論

斑鳩地域には、約 20 度西偏する地割り（偏向地割）が遺存している。この偏向地割を最初に指摘したのは、田村吉永氏であった。田村氏は 20 度西偏する道路が斑鳩宮・若草伽藍と同時期とみて、さらに 46 町の偏向地割の範囲を法隆寺の所領とした（田村 1949・1962）。その後、田村氏の指摘は弥永貞三氏や今宮新氏らによって、偏向道路は条理制の起源にかかわる偏向地割へと論点が変わった（弥永 1956・今宮 1957）。さらに、服部昌之氏は 10 度西偏する小規模な条里も斑鳩に成立したとした（服部 1983）。

そして、岩本次郎氏は大縮尺の地図と国土座標をもとに、偏向地割を再検討し、約 20 度西偏する 300 高麗尺の地割と、8 度 5 分西偏する地割があり、前者を 7 世紀前半の上宮王家の、後者を 7 世紀末から 8 世紀初頭の膳氏の開発に伴うものとした（岩本 1983）。この偏向地割を龍田道との関連で、道路遺構とみる見解（山川 1996）や、250 高麗尺の都市の方格地割とみる見解（千田 2001）、さらに、偏向地割を利用した偏向条里につながったという見解もある（山本 2004）。

偏向地割の遺存度

21 度西偏する偏向地割は、龍田道の東半で顕著にみられるが、その西延長上では、この地割の痕跡はみられない⁸⁾。一方、東院の南東から中宮寺跡南辺（幸前地区）にも顕著にみられ、西院伽藍の西側の西里地区やさらに西方の龍田一丁目でも断片的に遺存地割がみられる（本稿では「斑鳩大路」と仮称する）。さらに、この「斑鳩大路」に直交する地割りがいくつかみられる。西里地区集落内や西院伽藍西門の南側築地も、この方位を示す。また、東大門の北側築地に沿う道路も同様の方位である。この他に幸前地区の中宮寺跡の東や北方にみられる。

このように、偏向地割りは「斑鳩大路」北側の西里・東里・幸前地区でみられるが、「斑鳩大路」と龍田道の間にはみられない、また、龍田道の南側でもみられない。これらのことから「斑鳩大路」の北側の西里から幸前地区までの 48 町が偏向地割の範囲と推定されてきた。しかし、「斑鳩大路」と直交する遺存地割はあるが、平行するものは、意外と少ない。このことや、遺存地割りの残存状況からは、「斑鳩大路」の存在は推定されるが、方格地割の存在を積極的に推定することは難しいと考える。

「斑鳩大路」の復元

「斑鳩大路」は方位と遺存度からみて、直線道路の可能性を考えるが、この道路は若草伽藍南大門想定地と完全に重なる。この周辺では、いくつか調査がされているものの、南大門及び古代の道路遺構は確認されていない。この要因は、若草伽藍や斑鳩宮の立地が影響していると考えられる。いずれの遺跡も尾根の延長にあたる微高地に立地している。若草伽藍の等高線をみても、「斑鳩

大路」よりも、南に高まり（造成地形）が伸びており、「斑鳩大路」は、これを避けるように南に張り出していたと考えている。つまり、直線を指向するものの、丘陵などの微高地を避けるように通過していたと考えられる。このような事例は、飛鳥の山田道でもみられ、古宮遺跡の調査では、尾根の張り出しに合わせて7世紀前半の山田道が迂回している状況が窺われる。それが7世紀後半になると、直線の道路へと付け替えられている（奈文研 2010）。つまり、7世紀前半の古道は、直線を指向するものの、丘陵や湿地などがあれば、それを避けて通過するが、7世紀後半には、小規模な丘陵は削平し、湿地は埋め立てて、直線で道路を施工する。このことからみて、斑鳩の7世紀初頭の道路も、直線を指向するものの、丘陵などがあれば、それを避けて通過したと考えられる。

このように「斑鳩大路」は直線を指向しながらも、地形の影響を受けて部分的に蛇行する道路であり、このような不安定な直線道路が、造営方位の振れ幅にも影響していると考ええる。

龍田道の経路

龍田道は、富雄川と竜田川の間を斜行するが、東半と西半では造営方位が異なっている。東半は21度西偏するが、法隆寺西院伽藍の参道の南端に接続するあたりで、6度西偏する方位に変化する。

ここでまず検討しなければならないのは、この龍田道が21度西偏しながら、直線で竜田川を渡る可能性である。富雄川の右岸の渡河地域の龍田道南接地には上宮遺跡と酒ノ免遺跡がある。上宮遺跡では、奈良時代以前の7世紀前半と推定される遺構に、約20度西偏する柱穴状遺構もみられるが、方形の柱掘形のほか円形の柱穴もあり、確実ではない。また、32～34度西偏する溝などもあり、現状では上宮遺跡の7世紀前半の遺構が20度西偏するとは断定できない。酒ノ免遺跡は、6世紀から7世紀前半まで続く集落で、時期ごとに方位が変化するが、7世紀初頭とされる掘立柱建物は龍田道の方位と類似するが、その前後の時期の遺構は、方位が大きく異なる。これらのことから、周辺遺跡は龍田道に規制されていたとはいえない。一方、竜田川の渡河地区にあたる稲葉車瀬遺跡では、7世紀初頭に竪穴建物から掘立柱建物に変化するが、その造営方位は9～18度西偏、34～38度西偏と2種類あり、龍田道の21度西偏する方位とは一致しない。

このことから、直線の龍田道は隣接遺跡からの検討ではルートを特定できない。また、法隆寺西院伽藍参道南端よりも西方では、想定ラインに斜行する遺存地割はみられないことや、「斑鳩大路」の西端が竜田大橋付近で、現奈良街道と合流することからみて、現道が龍田道を踏襲すると判断する。

遺跡の造営方位

これまでの斑鳩の偏向地割研究は、岩本氏の研究が一定の到達点であり、その理解が一般的である。この地割りを基に、方格地割の都市区画あるいは水田区画が形成されたとされている。しかし、個々の遺跡における造営方位を詳細にみると、バラツキがある。これを整理・指摘したのが、山本崇氏らの研究であった（山本ほか 2007）。ここでは山本氏らの研究成果に、その後の報告・調査成果も含めて、改めて整理する⁹⁾。

現在の法隆寺西院伽藍及び東院伽藍の造営方位は8～9度西偏する。これに対して、前身伽藍にあたる若草伽藍跡の造営方位は、23度5分43秒から25度2分6秒と、計測位置によって異

なる。その平均値から24度3分55秒としている。この他に若草伽藍関連遺構で、大きく振れるものを除くと、概ね20～26度西偏に収まる。よって、若草伽藍に関連する遺構の造営方位は、20～26度西偏とすることができる。

一方、東院下層（斑鳩宮）の方位は16～17度西偏であるが、関連遺構を含めた振れは、大きく振れるものを除くと、14～18度西偏する範囲に収まる。中宮寺跡の中心伽藍は4～5度西偏するのに対して、下層遺構（中宮）と思われる掘立柱遺構は、8～10度西偏する。いずれも、偏向地割りとは、大きく異なるが、寺域南辺に位置する溝は21度西偏することは注目される。法起寺の伽藍方位は3度西偏するが、寺院以前の遺構群は20～26度西偏とまとまっている。法輪寺は16度西偏の方位を示す。

ここまでみた矢田丘陵南麓の諸宮・諸寺院よりも南方の龍田道に南接する遺跡群がある。上宮遺跡と酒ノ免遺跡である。上宮遺跡は、奈良時代の大型建物群はほぼ座標北を示すのに対して、7世紀前半の遺構は方位が様々で、現段階では遺構方位を決めがたい。一方、その西方にある酒ノ免遺跡では、遺構の重複があり、45度西偏→0度→20度西偏→70度西偏と変遷している。いずれも掘立柱の集落で、このうち7世紀初頭は20度西偏するが、その前後の段階では大きく振れる。さらに龍田道を西に直線で延長した北接の竜田川手前に稲葉車瀬遺跡がある。丘陵の先端にあたるここでは、5～6世紀の古墳が築造された後に、6世紀末～7世紀初頭の竪穴建物の集落がある。これらの廃絶後、7世紀初頭に掘立柱建物の集落となる。これらの掘立柱建物の造

表1 斑鳩諸宮・諸寺の造営方位

	斑鳩宮	斑鳩寺 法隆寺	中宮寺	岡本宮寺 法起寺	法輪寺	鮑波宮
600(遣隋使)	造営開始 605 遷宮 (聖徳太子)	造営開始 610頃 金堂 完成	(穴穂部 間人皇后)	(刀自古郎女)		(菩岐岐美 郎女)
622(太子没)	(山背王)	620代 塔完成	金堂造営		622 仏堂造営	(長谷王)
643(山背王没)			塔造営	638 金堂造営		
670		670 焼失				
710		680 金堂完成 690年代 中門 700年代 回廊		685 塔造営	670 金堂造営 塔造営	
0～5度西偏 8～10度西偏 14～18度西偏 20～26度西偏		739年 東院				767 鮑波宮

宮方位は、大きく 9～18 度西偏、34～38 度西偏にわかれる。

このようにみると、各遺跡の方位にバラつきがあることが再確認できる。これまで約 20 度西偏すると一括されていた造宮方位であるが、7 世紀初頭では、若草伽藍跡及び法起寺下層は 20～26 度西偏で共通しているのに対して、若草伽藍に隣接する東院下層（斑鳩宮）とでは、2～12 度の違いがみられる。これを施工誤差の範囲とみることも可能ではあるが、偏向地割内にある中宮寺跡下層（中宮）では 8～10 度西偏と、その違いは明らかである。一方、龍田道に面した酒ノ免遺跡では、7 世紀初頭に 23 度西偏で、やはり龍田道の方位に近いが、その前後の時期は方位が一致しない。上宮遺跡は明確に造宮方位を確定できない。

7 世紀前半（太子没後）になると、法起寺が正方位にちかい 3 度西偏で建て替えられ、中宮寺も 4～5 度西偏で建てられており、南北方位を意識している。これに対して法輪寺前身寺院は 16 度西偏する。これは地形に影響を受けているためと考える。

さらに 7 世紀後半には、若草伽藍焼失後、8～9 度西偏する西院伽藍が造宮される。西院伽藍の南大門は、現南大門よりも北の、中門のすぐ前に建てられていた。僧坊が焼失し、子院が増加する中で、長元 4 年（1031）に現在位置に移され、寺域が拡大した。それまでは旧南大門以南は寺域外であった。この地域にも 21 度西偏する地割り（西面大垣南半・東面大垣北半）がみられる。つまり「斑鳩大路」が直線で通過しており、これに直交する地割りも、この段階には残されていたことがわかる。

奈良時代の天平 11 年（739）には、西院伽藍と同方位を示す東院伽藍が造宮される。これらにあわせて、同方位の地割りが法隆寺南方にみられると共に、龍田道までの長大な参道がみられる。また、龍田道の南では、神護景雲元年（767）に称徳天皇が行幸した上宮遺跡がほぼ正方位の建物として建てられている。

これらの成果からは、7 世紀初頭における造宮方位は、完全に一致するとは言いがたく、微妙な差異を認めるべきであろう。さらに 7 世紀前半には、正方位（0～5 度西偏）を指向する寺院が建てられた。そこで、これらの違いが何に起因するかを検討する必要がある。

龍田道の設置時期

ここで問題となるのは、この龍田道の設置時期である。龍田道は 7 世紀初頭から存続し、「斑鳩大路」と併存していると考えられている。それは、両者が平行し、21 度西偏することによる。しかし、龍田道の西半は、西院伽藍に近い 6 度西偏して、龍田大橋まで伸びていた。この龍田道に向かって、500m にも及ぶ参道が延びており、両者の関係が注意される。そもそも 500m 足らずの間隔で 2 本の道路が併走するのは不自然である。先にみたように龍田道に面する 7 世紀代の遺跡が、龍田道の方位に規制されているとは確認できず、奈良時代には、龍田道の方位よりも、北を意識した方位をとる。また、正方位の条里地割りは、龍田道を越えて、「斑鳩大路」まで広がっており、龍田道は、条里地割りの中を斜めに横断している。これらのことから、龍田道の設置は奈良時代まで下ると考えられ、「斑鳩大路」が廃絶あるいは機能しなくなった段階で、龍田道が設置されたものとする。つまり、「斑鳩大路」が 7 世紀段階の「龍田道」といえる。

斑鳩諸宮・諸寺の立地

ここまで各遺跡の造宮方位や古道についてみてきたが、発掘調査及び現地踏査により、微地形

の復元も可能になってきた。若草伽藍は天満池の西、斑鳩宮は天満池・片野池の間に伸びる尾根を削平し、造営されている。宮の中心は、東里集落にあると推定でき、若草伽藍との間にも天満池下流の流路が流れていることがわかる。中宮寺跡は、現状では把握しづらいが、富郷陵墓参考地のある丘陵の南へと伸びる微高地に位置すると考えられる。さらに南には駒塚古墳や調子丸古墳があり、やはり同一の微高地がのびていると考えられ、この微高地は富雄川右岸の上宮遺跡まで伸びていると考えられる。三井地区の法輪寺は、斑鳩溜池の西側尾根延長を削平し、寺院を建立しており、三井集落はまさにこの尾根上にのる。岡本地区の法起寺（岡本宮）も、北からの尾根がのびる微高地に建てられている。

これらのことから、斑鳩諸宮・諸寺は、いずれも尾根を削平した、あるいは尾根の延長にあたる微高地上に建てられており、各施設の間には大小の谷（流路）が流れていたことが判明する。

また、斑鳩寺・斑鳩宮の敷地が雁行状にずれていることや、その振れに微妙な違いがあること、特に、中宮・中宮寺跡は、偏向地割内にありながら、大きく方位が異なることから、偏向地割は、方格の地割を形成するものではなく、「斑鳩大路」を基軸として、その北側の微高地に各施設を配置したものと理解すべきであろう。このため、南東へのびる地形に合わせて、各施設が造営され、それぞれに微妙な方位の違いがみられると考える¹⁰⁾。

VI 斑鳩の空間構成の時期別変遷

斑鳩の空間構成（7世紀初頭）

聖徳太子が斑鳩宮と斑鳩寺を造営した7世紀初頭、併せて岡本宮や中宮・鮑波宮などの斑鳩諸宮の造営も行った。この時期の斑鳩地域には、矢田丘陵南麓を約20度西偏して通過する「斑鳩大路」が基準となる。この道路は直線を指向するものの、不安定に蛇行するものであったと推定する。特に、斑鳩寺（若草伽藍）は、「斑鳩大路」に面しているが、斑鳩宮は推定路線から100m北に離れている¹¹⁾。これは、斑鳩宮南限の南側が一段低く、「斑鳩大路」に面して皇子宮を造営できなかったためと考える。先述したように、斑鳩諸宮・諸寺は、微高地や尾根を削平した安定した高台に造営している。よって、必ずしも「斑鳩大路」に面した配置とはなっていない。また、中宮は偏向地割内にありながら8～10度西偏し、「斑鳩大路」とは大きく方位が異なる。これらのことから、偏向地割が方格地割ではなく、「斑鳩大路」を基軸に、その方位を意識しながらも、地形（尾根の方向）に規制されたものと推定する。

一方、ここから北東に離れた岡本宮は、20～26度西偏と、若草伽藍に酷似するが、むしろ、すぐ東隣接地を通過する太子道（筋交道）に規制されたものと考えられる。さらに上宮遺跡や酒ノ免遺跡、稲葉車瀬遺跡では、龍田道に沿うものの、その方位に規制されていない。このことは、龍田道の敷設時期が奈良時代まで遅れることに関連しよう。これらの遺跡は、いずれも微高地に造営されており、これより南方は、低地となっており、居住には適さない場所であった。

このような「斑鳩大路」と諸宮・諸寺の配置関係は、7世紀初頭の飛鳥の空間構成と類似する。古山田道に面して、飛鳥寺をはじめ、小墾田宮や、蘇我氏の邸宅・寺院を配置している。古山田道は直線を指向するものの、障害物があると、すぐに迂回する不安定な直線道路であり（相原

2013)、施設の方位も道路や地形の影響を受ける。斑鳩の空間も、このような配置に上宮王家一族の諸宮・寺院を配置したと推定する。

斑鳩の空間構成（7世紀前半）

推古30年（622）に聖徳太子が没した¹²⁾のち、斑鳩諸宮の多くが寺院に建て替えられる。中宮は中宮寺に、岡本宮は法起寺に、そして、新たに法輪寺の造営がはじまった。いずれも聖徳太子や母・妃の墓前を弔う寺院であり、その造営方位は5度以下振れで、北を意識した方位で建てられたものである。唯一、法輪寺前身寺院は16度西偏しているが、これは立地によるものであろう。

しかし、皇極2年（623）、上宮王家は蘇我入鹿によって滅ぼされた。山背王だけでなく、一族が自害した。斑鳩宮や飽波宮に火災の痕跡があることから、この時に斑鳩宮は灰燼に帰したものと考えられる。

斑鳩の空間構成（7世紀後半）

天智9年（670）、斑鳩寺（若草伽藍）が火災で焼失した。そのため、若草伽藍の北西の尾根を造成し、西院伽藍の建築がはじまる。その方位は8～9度西偏で、造成の方位とも一致する。

しかし、西院伽藍の南方（旧南大門より南）では、21度西偏する地割りが残されており、未だ、「斑鳩大路」は健在であった。おそらくこの段階には、「斑鳩大路」は直線を指向する道路から、直線道路へと整備されたものと考えられる。

斑鳩の空間構成（8世紀）

天平11年（739）に東院伽藍が建設されるが、それは西院伽藍と方位を同一とする。これら西院伽藍・東院伽藍が建立されている頃になると、「斑鳩大路」は東院伽藍の東を除いて廃止される。伽藍の造営によって、法隆寺の新たな造営方位ができたためである。また、神護景雲元年（767）には称徳天皇が行幸した上宮遺跡が正方位で造営され、この段階で、「斑鳩大路」と平行する龍田道が敷設される。龍田道の西半は6度西偏で築道されるが、これは西院伽藍の方位及び南大門から伸びる参道と、方位が近似する。龍田大橋の場所は、「斑鳩大路」の段階から決まっていたため、龍田道は「く」地形に屈曲するのであろう。この頃、斑鳩地域には、広範囲にわたって、正方位の条里地割が施工されたと考えられる。その範囲は、「斑鳩大路」以南であることから、龍田道の築道は、条里地割よりも新しいと考えられる。

Ⅶ 総括 ―上宮王家の斑鳩の実像―

聖徳太子は、西暦600年の遣隋使の帰国報告を受けて、斑鳩に居を構えた。それは推古天皇の小墾田宮造営と並行するもので、冠位十二階や憲法十七条の制定などの、国家基盤形成の一環であった。

ではなぜ斑鳩だったのか。斑鳩は、飛鳥から離れるものの、難波から陸路・水路で大和へ入ってきた入口にあたり、盆地内の各河川はすべて大和川につながっている。その意味で、斑鳩は交通の要所であった。さらに、聖徳太子の妃に膳菩岐々美郎女（膳大郎娘）がいるが、その父である膳部加多夫古が、当時、斑鳩周辺を治めていた。このことも聖徳太子が斑鳩との結びつきをも

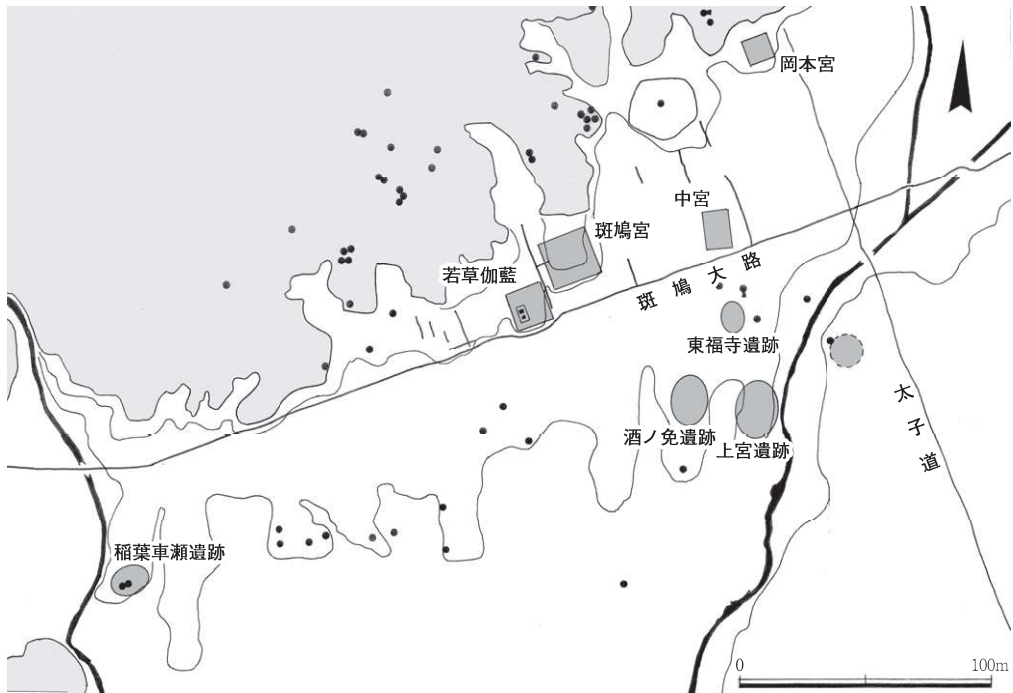


図2 斑鳩の空間構成（7世紀初頭）（1:30000）



図3 斑鳩の空間構成（7世紀前半）（1:30000）

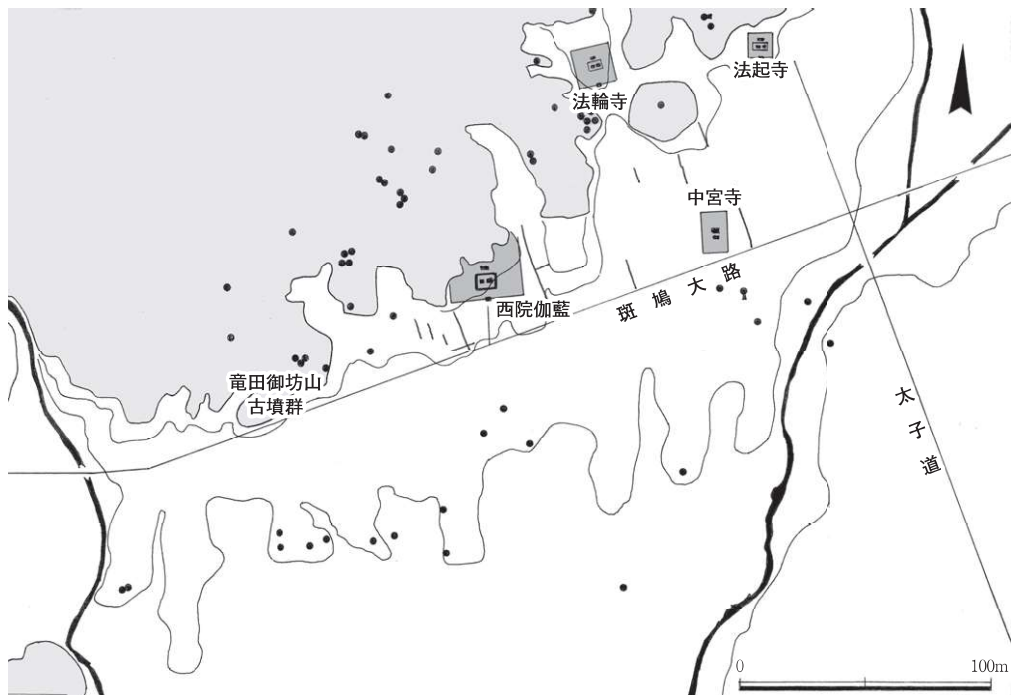


図4 斑鳩の空間構成（7世紀後半）（1:30000）



図5 斑鳩の空間構成（8世紀）（1:30000）

つ契機となっていた。

その斑鳩には、矢田丘陵の裾を通過する「斑鳩大路（古龍田道）」を築道し、これを基軸に、安定した微高地上に斑鳩諸宮と斑鳩寺を造営した。さらに自らの宮だけではなく、母や妃の諸宮を配置したのである。従来、母や妃たちは、婚姻を結んでも実家に残るものであるが、太子は一族を連れて斑鳩に遷ったことになる。このことにより、斑鳩が上宮王家の王都となり、当時としては、飛鳥に対する「副都心」的な位置づけとなる¹³⁾。

聖徳太子没後は、山背王によって、多くの諸宮が寺院へと建て替えられた。これは聖徳太子並びに母・妃たちへの追慕のためであり、現在につながる斑鳩諸寺の景観が形成されていくことになる。しかし、皇極2年（656）、蘇我入鹿によって山背王一族は倒される。ここに上宮王家は完全に滅ぼされることになったのである。さらに天智9年（670）に若草伽藍が焼失したことにより、完全に消えた。

しかし、若草伽藍焼失後、すぐに法隆寺の再建がはじまった。おそらく国家が全面的にサポートしたのであろう。特に、奈良時代には、光明皇后や橘三千代など、法隆寺の造営や多くの寄進をしており、聖徳太子の仏教思想は、広まっていくことになった。それは太子の「和」の精神と共に、現在にも受け継がれている。

註

- 1) 『日本書紀』の書き下し文は、岩波書店の『日本書紀』による（特に記載のない史料は『日本書紀』による）。
- 2) 法隆寺再建・非再建論争については島田 2007 が詳しい。
- 3) 聖徳太子の名称については、厩戸皇子や厩戸王など多くの異名があるが、本稿では東野 2017 に倣って、「聖徳太子」と呼ぶ。
- 4) 推古朝の政策の多くは、聖徳太子と蘇我馬子の共同作業と考えている。その場合、太子が企画・立案するプランナー、馬子が運営・実行するディレクターと理解している。
- 5) 本稿では、東西方向の遺構に対しても、混乱を避けるために直角に変え、北（国土座標）からの方位に変換して記載する。また、国土座標からの数値が明記されていないものは、報告書の図面から読み取り、国土座標の振れに換算した。
- 6) 中宮の場所については、中宮寺跡中心部ではなく、伽藍の西方あるいは北方の中宮寺跡周辺遺跡の可能性も指摘されている（平田 2022）。
- 7) 講堂・金堂の調査での基壇縁の振れは、20～22度西偏となる（斑鳩町 2007・2011）。いずれも基壇石列という、測定の困難な遺構で、検出長が短いことも考慮する必要があるが、この場合、若草伽藍と酷似する方位となる。今後の調査で、明確にする必要があろう。
- 8) 龍田道が直線で施工され、稲葉車瀬を通過するルートを通るとすると、竜田川を渡った後、大和川を複数回、複雑な渡河をしないとイケない。むしろ現在の竜田大橋で渡河した方が、大和川を回避しながら竜田越えへと向かう。よって、竜田大橋を渡るルートを第一に考えるが、直線を指向するという意味では、稲葉車瀬を通過するコースの検討も必要である。
- 9) 山本ほか 2007 以外のデータについては、筆者が報告書掲載の図面から読み取り、座標北からの振れとして算出した数値である。
- 10) 近年刊行された『新修斑鳩町史 上巻』でも、平田政彦氏が、同様の見解を示している（平田 2022）。
- 11) 『日本霊異記』中巻第一七話の「広さ一町もある聖徳王宮の前の路」は、斑鳩宮の一町南にある「斑鳩大

路」のことを指していると考えている。

12) 『日本書紀』では621年とする。

13) 聖徳太子が居を遷す先を斑鳩にした理由は、本文の通りであるが、なぜ飛鳥から離れた所に遷したかは、蘇我馬子との不和や、政治から離れて、宗教に心酔したなどと説かれている。しかし、聖徳太子と蘇我馬子との役割分担から、企画立案は、都にいらなくても遠隔できるからという考え方も可能であろう。コロナ禍の現在であるからこそ、リモートによる遠隔のワークスタイルを実感できる。

参考文献

- 相原嘉之 2013「飛鳥寺北方域の開発－7世紀前半の小墾田を中心として－」『橿原考古学研究所論集 第十六』八木書店
- 斑鳩町教育委員会 1992「上宮遺跡」『平成3年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会
- 斑鳩町教育委員会 2004『若草伽藍跡西方の調査』
- 斑鳩町教育委員会 2007「法輪寺旧境内遺跡（第12次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13（2001）年度』
- 斑鳩町教育委員会 2011「法輪寺旧境内遺跡（02-1次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』
- 斑鳩町教育委員会 2013『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』
- 石田茂作 1960「法起寺の発掘」『奈良県観光 第48号』奈良県
- 石上英一 1971「官奴婢について」『史学雑誌 80編10号』史学会
- 今宮 新 1957『上代の土地制度』至文堂
- 弥永貞三 1956「条里制」『奈良時代の貴族と農民』至文堂
- 岩本次郎 1983「斑鳩地域における地割の再検討」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 観光資源保護財団 1972『法輪寺三重塔調査報告書』
- 国立博物館 1948『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』
- 酒井龍一 2006「聖徳太子の都市計画－斑鳩の里で太子の髭に逢い－」『文化財学報 第23・24集』奈良大学文学部文化財学科
- 酒井龍一 2009「推古朝都市計画の復元的研究」『文化財学報 第27集』奈良大学文学部文化財学科
- 鷲森浩幸 2001「法隆寺の所領」『日本古代の王家・寺院と所領』塙書房
- 島田敏男 2007「法隆寺再建・非再建論争史と若草伽藍」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 鈴木嘉吉 1995「法隆寺新再建論」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 千田 稔 2001「わが国における方格地割都市の成立」『浜田青陵賞受賞記念論文集Ⅰ 考古学の学際的研究』昭和堂
- 田村吉永 1949「條里より見たる法隆寺」『綜観法隆寺』河出書店
- 田村吉永 1962「條里制の起源について」『日本歴史 第164号』吉川弘文館
- 東野治之 2017『聖徳太子－ほんとうの姿を求めて－』岩波書店
- 奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会 1985『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺
- 奈良文化財研究所 2007『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』
- 奈良文化財研究所 2010「古宮遺跡の調査－第152-8次」『奈良文化財研究所紀要 2010』
- 奈良県 1969『法起寺旧境内緊急発掘調査概報』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2016『稲葉車瀬遺跡－斑鳩パークウェイ建設に伴う発掘調査報告書（2）－』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2019『大和国条里復原図』由良大和古代文化研究協会

- 仁藤敦史 1985 「『斑鳩宮』について」『日本歴史 451号』吉川弘文館
- 服部昌之 1983 「大規模周辺地域の条里－山と盆地の場合－」『律令国家の歴史地理学的研究』大明堂
- 平田政彦 1996 「聖徳朝飽波宮の所在地に関する考察－斑鳩町上宮遺跡の発掘調査から－」『歴史研究 第33号』大阪教育大学
- 平田政彦 2003 「斑鳩地域における飛鳥時代寺院の一樣相－法輪寺創建年代私考－」『橿原考古学研究所論集 第十四』八木書店
- 平田政彦 2020 「斑鳩宮」『聖徳太子の足跡－斑鳩宮と斑鳩寺－』斑鳩文化財センター
- 平田政彦 2022 「考古編 第二章 考古学からみた斑鳩の古代」『新修斑鳩町史 上巻』斑鳩文化財センター
- 藤井利章 1986 『奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究』斑鳩町教育委員会
- 光谷拓実・大河内隆之 2007 「年輪年代法による法隆寺西院伽藍の年代調査」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 山川 均 1996 「大和における七世紀代の主要交通路に関する考古学的研究」『ヒストリア 第150号』大阪歴史学会
- 山本 崇 2004 「斑鳩の歴史的・地理的特質」『和国の教主 聖徳太子』吉川弘文館
- 山本崇・鶴見泰寿・平田政彦・大林潤 2007 「斑鳩地域の発掘調査と地割」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所

挿図出典

- 図1：橿考研2019に加筆
- 図2～5：筆者作成
- 表1：筆者作成

Abstract

In the ancient Ikaruga area, the family of Prince Shotoku built palaces and temples which had an urban appearance. A plan to restore the structure with square plots has been proposed. However, a detailed study of the ages and transitions of the ruins, as well as the direction of construction, reveals that the palaces and temples were located on slightly elevated ground, as compared with the old road (Ikaruga Oji). Due to such similarities with the urban structure in the Asuka area of the same period, we can assume that it was built based on the same idea.

Keywords: Prince Shotoku, Ikaruga, Horyuji Temple, Tatsuta Road, urban planning